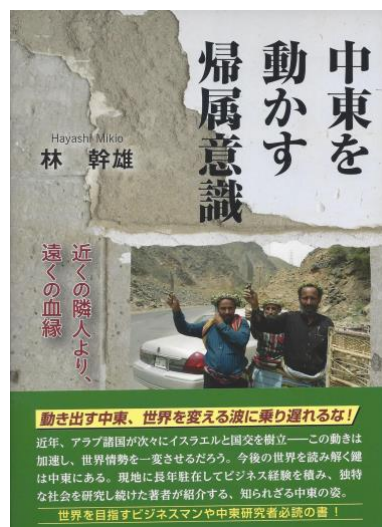


書籍紹介

『リベラルなイスラーム』（大川玲子著、慶應義塾大学出版会、2021年1月15日）

本書は『イスラーム化する世界』（平凡社新書、2013年）、『クルアーン—神の言葉を誰が聞くのか』（慶應義塾大学出版会、2018年）、『コーランの世界』（河出書房新社、2005年）、『チャムパ王国とイスラーム』（平凡社、2017年）などのユニークで深い視点から多くの著作を発表し続けている著者の新しい視点を豊富な文献を駆使してまとめたものであり、大学の講義形式で著者の立場を明確に表現したものである。ともすれば閉鎖的だとか封建的だとか戦國的だとか女性差別的だとか言われるイスラームについて、「リベラル」というコンセプトで切り開いていくという、一見冒険ともとれる思索をかさねて、イスラームという宗教が本来、含蓄している共存意識や人道主義や平和主義などを考えようと私たちを導くものとなっている。一読したら、イスラームだけでなく、私たちのこの世界をみる見方が変化していることに気づくかもしれない。



『中東を動かす帰属意識』（林 幹雄著、ミルトス、2021年1月28日）

本書のカバー写真は、イエメンの国境付近のサウジアラビアのアスィール州、ラビア村の人々であり、短刀はこの地域の人々の常備品で一種の飾りでもある。彼らは頭に野の花で編んだ冠をかぶって出かけるところであった。決してテロリストの一味ではない。この写真が著書の立場をよく表わしている。私たちは日常、中東の人々に対して、一見ただけで物事の良し悪しを判断してしまいがちであるが、著者は、表面だけ見ているは本当の

ことがわからないと言いたかったのだと思われる。本書の著者は商社マンとしての仕事を通じて親交を深めた地域社会のありのままの姿を下地にして、中東地域の歴史やイスラーム社会の在り方を真摯に学び、一冊の書籍にまとめたものである。そのために本書は、この地域に関する決まりきった表現や言い尽くされた判断にとらわれることなく、先入観のないまなざしで温かく書き綴られている。これは学者やジャーナリストたちとは一線を画する立場であり、一人の日本人として、中東地域の人々を同じ人間であるという深い尊敬の念をもって見つめた成果でもあり、今日の中東世界を読み解く鍵を提供してくれる著作である。

『中東政治入門』（末近浩太著、ちくま書房、2020年9月10日）

本書の著者は中東政治の研究において幅広い比較政治学・国際関係学などの知識を駆使して、複雑怪奇と言われる中東政治について明解な分析を提供してくれる気鋭の研究者である。岩波新書から出版された『イスラーム主義』（2018年）では、世界中で世俗化が進むかに見えた近年になって、その潮流に反するように、宗教の旗を掲げて急激に勃興してきた戦闘的イスラーム集団について、その複雑な復古的思想を明確に整理・分析して分かりやすく提示した。本書は、前作で明らかにされたイスラーム主義が実際の紛争のなかでどのような役割を担っているのかを考察し、それによって国家同士の対立や内紛がさらに深刻度を増す事態を、中東世界を取りまく国際政治を分析することによって、明らかにしようとした労作である。この書籍だけで中東政治の全貌が理解できるというほど、実態は複雑に入り組んでいるが、その紛争の構図だけでも明らかにできることは、本書が国際政治の渦の中で藻掻く中東政治を理解する優れた鍵ともなることを示している。

文責：塩尻和子

